

「法華経展」へのメッセーヂ

池田大作

スペインで初となる「法華経——平和・共生のメッセーヂ」展が、レリダ市立図書館、レリダ大学、ユネスコ・レリダ協会との共催で開催されますことを心よりお慶び申し上げます、開催にご尽力をたまわりました全ての関係者の皆さまに、心より御礼申し上げます。

多くの文明が去来し、肥沃な精神的土壌を蓄えてきたカタルーニャの古都レリダ市において、東洋の精神的遺産である『法華経』の展示会が開催されますことに、私は深い意義を感じております。

二〇〇四年の国連総会演説において、サパテロ首相

が「文明の同盟」を提唱されましたが、スペインのみならず欧州の中で文明間・宗教間対話の先駆的な役割を担われてきたカタルーニャの諸先生方と、東西の精神の対話ができますことは、文明間対話を通して共生の社会を希求する私どもにとりまして、最大の喜びです。

『法華経』をはじめとする仏典は、二千数百年にわたる、東洋諸民族の精神的支柱となつて、豊潤な文化の華を咲かせてきました。

今回の展示には、法華経写本を中心に、代表的な仏

典の数々が展示されております。

仏教は、インドをはじめとする南アジア、西域（シルクロードに沿った中央アジア）、そして中国、韓半島、日本、東南アジアの文化・文明の基調となり、その精神の結晶として多くの「仏典」が編纂され伝承されてきました。

東洋の諸民族は、仏典の中に釈尊以来の「宇宙生命との対話」を見出し、宇宙根源のリズムを「法」として表現し続けてきたのであります。

東洋的思考の特徴は、自己（内なる宇宙）と大宇宙（外なる宇宙）との対話、「宇宙生命」への融合、そして顕在化にあります。つまり、「内在」と「超越」の相即であります。

仏教において、釈尊は、広大なる自己自身の「内なる宇宙」を探求し、その究極において自己を超越し、「外なる宇宙」と一体化した「宇宙生命」そのものを、法（ダルマ）として覚知したのであります。

釈尊の覚者としての「智慧」と「慈悲」が民衆救済へと向かう時、仏教史を飾る多くの仏典が編纂された

のであります。

その中で、特に『法華経』は、自ら、釈尊の悟達の法（ダルマ）の表出と体現を宣言した經典であります。『法華経』が東洋の諸民族に最も親しまれ、広く伝播し、人々の「魂」を救済してきたのも、この經典の内包する深遠な宗教性——宇宙生命との融合の境地とその平易なる表現法にありました。

私は、西洋文明を担う人々が法華経写本等として結実した「仏教の真髄」「東洋民族の魂」との深い次元での「精神対話」をされることを希求しております。

その意味において、若干、『法華経』の特質を「東洋文明と西洋文明の対話」に役立つ視点から、三点にわたって要約してみたいと思います。

第一に「万物共生の思想」、第二に「永遠なるもの」の探求、第三に「平和創出への行動」であります。

万物共生の思想

第一の「万物共生の思想」は、『法華経』の「方便品」をはじめとする前半部分に展開されております。



「法華経展」で。開催地のカタール・ニヤ州では宗教間対話運動が活発であり、スペイン全土から宗教団体の代表・学者らが集う「宗教会議」を2005年から開催。「法華経展」は「第4回カタールニヤ宗教会議」（本年6月／主催ユネスコ・レリダ協会）の開幕行事となった。同宗教会議は、本年12月にオーストラリアで開催予定の「世界宗教会議」のプレ行事でもある。

「方便品」には、仏がこの世に出現した目的、すなわち「一大事因縁」が衆生の「仏知見」を「開き」「示し」「悟らしめ」「仏道に入らしめる」こととして明かされております。ここに「仏知見」とは、宇宙生命に具わる光り輝く智慧のことであり、中国の天台は「仏性」と同義に解釈しております。

『法華経』では、二乗・女人等を代表に挙げて、全ての人々の生命内具の「仏知見（仏性）」の内在とその顕在化を力説しております。ここに人類・民族・ジェンダー・職業・文化を問わず、全ての人々に「仏知見」が具わっており、その顕在化によって自他ともに幸福への道を開くことができるとする、人間の本質的「平等性」が示されるのであります。この仏知見の内在こそ、仏教の「生命尊厳」の根拠なのであります。

ジェンダー・文化・人種・民族等の差異にかかわらず、否、その差異のゆえに、相互に尊敬し合い、全ての人間がその内なる可能性を顕在化しつつ生を営む時、「共生・共存」の「地球文明」が浮かび上がるのであります。

「薬草喻品」では、「共生・共存」のあり方を、自然生態系にまで広げて「万物共生」の姿として描きあげております。

「三草二木」とは、種類や大きさの異なる草木（三草二木）が空一面の雲から降り注ぐ雨に潤されて、平等に潤いながらも、それぞれの特質に応じて生育するという譬喩であります。草木の生育する大地、空から降り注ぐ雨は、仏の説法として表される「宇宙生命」の恵みであり、万物の生死の基盤であります。日本の日蓮は、草木の共生の姿を「桜梅桃李」と表現しております。草木として表示される自然生態系とともに、すべての衆生が栄えゆく姿が、仏教の描く「地球文明」の方向性であります。

〳永遠なるもの〳の探求

第二の「永遠なるもの〳の探求」は、『法華経』では、まず「宝塔品」における「宝塔」の出現から開始されております。

宝塔品では、大地から「宝塔」が涌现して、その塔

の中から過去の仏である多宝如来が、釈尊の説法が真実であることを讃えるのであります。

さらに、「從地涌出品」になると、この娑婆世界の下の虚空にいた六万恒河沙という膨大な数の地涌の菩薩が大地を割って出現すると説かれております。

そして「寿命品」では、この大菩薩の出現を契機として、弥勒菩薩の質問に応じる形で、釈尊の本地——久遠の仏〳すなわち〳永遠なる仏〳が明かされるのであります。

日蓮は、阿仏房という弟子から、「宝塔」の意義について問われた時、それはあなた自身の生命であると答えています。つまり、一個の人間生命に内包された「宇宙生命」が輝ける宝塔として出現したのだとの意であります。そして天台は、大地の底、虚空のことを「法性の淵底」と表現しております。万物が生死をおりなす現実世界の深奥の場——それは釈尊の覚知した「宇宙生命」それ自体であります。

〳久遠の仏〳は、〳久遠の法（ダルマ）〳と一体であり、宇宙根源のリズムそのものを生きる仏であります。

「寿命品」では、生死流転の現実世界を超越しつつも、現実世界へと衆生救済のために顕在化する。久遠の仏の「永遠性」が明かされております。「娑婆世界説法教化」の文であります。久遠の法と一体の久遠の仏は、永遠なる救済仏であり、その「智慧」と「慈悲」の働きは、「未だ^{いま}曾て^{かつ}暫くも^{しばら}癒^{はい}」したことがないのであります。

平和創出の行動

第三の「平和創出への行動」をなす主体者を、『法華経』では「永遠なる宇宙生命」から涌現した地涌の菩薩や、「薬王品」以下の各品に説かれるさまざまな菩薩群として描きあげております。薬王は医学・保健の面を、妙音は音楽に象徴される芸術の開花を、普賢は学問・思想の貢献を示し、そして観世音は民衆の切なる現世的要望に耳を傾け、「無畏」の境地を与えゆく勇者として描かれております。

それぞれの菩薩的人格の中には、民衆救済への「慈悲の精神」がみなぎっており、それぞれの領域から「平



「法華経展」が開かれたレリダ市立図書館。レリダ市（カスティールヤ語ではリエイダ市）は紀元前から栄え、ユダヤ教、イスラーム教、キリスト教が交差する歴史を刻んできた

和の文化」創出への使命を果たす誓いと行動が展開されております。

その中でも、世界平和との関連性において注目すべきは、不軽菩薩であります。不軽菩薩は、「我は深く汝等を敬う」と言い、彼を迫害する人々を含めて、全ての衆生に内在する「仏性」を「但行礼拝」し、その顕在化を促し続けたのであります。あくまでも対話・非暴力に徹する不軽菩薩の中に、平和を希求し行動する今日の「世界市民」の姿を見出せるのではないでしようか。

このように『法華経』は、「仏性」の内在と顕在化という人間の本質的平等性に立脚する「共生・共存」の思想から、その淵源を「永遠なるもの」——「宇宙生命」としての「永遠の仏」「永遠の法」に求めつつ、さらに人類平和の創出のための「世界市民」像を菩薩群の活躍として指し示す経典であります。

万人に尊極の仏性が存するとの思想を基盤とした、人間への限らない信頼と尊敬が脈打つ『法華経』が、スペインの人々の豊かな心、他者に開かれた人間性と

本展を通して深く共鳴し、新たな文化創造への貴重な機会となりますことをお祈りしております。

(いけだ だいさく／創価学会インタナショナル会長)